

齋藤佳三と建築 —— 齋藤佳三「住宅改良と服装問題」によせて ——

佐藤 美弥

はじめに

矢島町に生まれたものは小学校・中学校の校歌の作者、そして町民歌「矢島の歌」の作曲者として同郷人齋藤佳三（一八八七～一九五五）の名に親しむ。また、小学校校庭の碑や日新館前の街灯から流れるメロディは彼の歌曲「ふるさとの」を絶えず顕彰しつづける。かように矢島人にとって、佳三はその音楽家としての側面とともに記憶されてきた人であった。

他方、町史に載る人物評¹にみるように、佳三は音楽にとどまらない多面的な活動を展開してもいた。東京美術学校で服飾学、意匠学を教授したこと、「商業美術」、「商業デザイン」といった用語をはじめて用いたこと、二度の渡独で吸収した新しい芸術の息吹を各分野に波及させ昭和初期の流行を生みだしたこと、帝国ホテル給仕や国民服のデザインを行ったこと、そして多くの歌曲をつくったこと、こうしたたんに「デザイナー」と表現するにあまりある、より広い意味でのデザイン、つまり人間の生活のあらゆる要素を総合的に構想しようとした佳三の営みを明らかにしてきたのが長田謙一の一連の研究である²。また、一九八八（昭和六三）年の「一九二〇年代・日本展」、一九九〇（平成二）年の「総合芸術」の夢 齋藤佳三展」といった展覧は「総合芸術」の実践者としての佳三の歩みを明らかにしてきたし、昨年末には佳三の母校、東京芸術大学大学美術館で回顧展が開催され、彼の全体像はよりはつきりしてきた。いま佳三の存在は日本近代史のなかで、とりわけ一九一〇年代後半以降の芸術・文化の動向を考えるうえで看過することはできない重要な位置を占めるにいたっているといっても過言ではない。

私は日本近現代史を専攻していて、とくに一九一〇年代から三〇年代にかけての大都市の文化や社会を対象としている。最近、当時の建築関係の雑誌記事を調査しているさいにぐうぜん佳三による記事を目にした。『建築世界』の第一二巻第六号（一九一八年六月発行）に掲載された「住宅改良と服装問題」³である【図1】【図2】。これは昨年の展覧の図録『齋藤佳三の軌跡』⁴に所収の詳細な文献リストからも洩れているものである。小稿では上記の記事を紹介しながら、佳三の「総合芸術」の最初期において建築がどのようにとらえられていたのか、という点にも触れてみることにしたい。

1 齋藤佳三の軌跡

まず、矢島人にとってはなじみ深い佳三ではあるが、行論上、長田の研究を参照しながら、佳三の人生とその事績について概観することしよう⁵⁾。

佳三は一八八七(明治二〇)年、館町に生まれ、秋田中学を中途退学したのち一九〇三年に上京、一九〇五年に東京音楽学校師範科に入学、一九〇七年音校を退学し、東京美術学校图案科に入学する。音校時代にはオペラ上演に深く関わり、一九〇六年に日本初のオペラ「羽衣」の主役を演じるほか舞台美術にも親しみ、美校への転身の契機となった。また、オペラはワーグナー熱とともに輸入されたから、ワーグナーの名とともに認識されてきた舞台上での諸芸術の統合、つまり「総合芸術」の考え方に佳三が触れる契機ともなったのである。一九一二年に渡独、ベルリンで音校時代からの友人山田耕筈と共同生活を送り、王立工芸学校で学ぶと同時に当時の新しい芸術をぞんぶんに吸収している。このころ佳三や山田ら若い学生を魅了した芸術とは当時勃興しつつあった、ヨーロッパの前衛芸術だった。ここでは詳述しないが、それは古典主義や中世主義といった歴史主義にもとづく伝統的な様式を忌避し、芸術家個人の創造性を生かした表現を追求するものであった。この洋行の経験はその後一九一〇年代から五〇年代にかけての佳三の全生にわたる活動の基調をかたちづくる。

一九一四(大正三)年の帰国後、一年志願兵としての入営を経て、一九二二年に再渡欧するまでが佳三の「総合芸術」の実践の最初期といえるが、その頃の佳三の活動を列挙してみる。

- ・パンフレットやレコードジャケットなど出版物のデザイン
- ・市販の浴衣、帝国ホテル給仕の制服、舞台衣装など服飾デザイン
- ・戯曲、歌曲などの創作

「総合芸術」とはいつても、平面デザイン、服飾、音楽・演劇が主な彼のフィールドだった。この時期、建築にかんじていえば一九二一年に親戚の住宅の一室であるという「工業学校長客間」をデザインしていることが注目される。

一九二二年から翌年にかけての再渡独後、佳三は以前にも増して多彩な活動を展開、長田によればそれは佳三の「人生の結実期」であった。小稿に関連しては一九二〇年代末から三〇年代の初めには工芸部門である帝展第四部に、住宅の一室をまるごとデザインした——家具の配置、個々の家具や壁面の意匠などの総合的なデザインといったような——作品を発表するにいたる。そこで佳三が採用したのはヨーロッパで流行したアール・デコの意匠と日本的な意匠の複合的な表現だった。それは二〇年代後半からは機能や経済性に関心が向きむしる装飾を排除する傾向にあった建築界とは異なる、より装飾性を重視するものであった。また佳三個人の文脈でいえば「総合芸術」をより広い視野で実践したものといえるかもしれない。

その後、一九五五(昭和三〇)年に他界するまで佳三は教育者として、また戦時期においても国民服のデザインをてがけるなどデザイナーとしての多様な活動を続けているがここでは詳述しない。

2 「住宅改良と服装問題」

以上みてきたように、一九一八(大正七)年というのは、佳三の活動が広く社会に認知されはじめる時期であることがわかる。文筆活動をみれば、それまで音校や美校の校友会誌への評論や創作の発表、詩作グループ未来社の同人誌『未来』への創作寄稿、『読売新聞』への滞欧記の寄稿などがあつたが、一九一七年に白木屋で「リズム模様」を用いた製品の個展を開催して以降には総合雑誌や芸術、服飾など専門誌への寄稿もめだつてくる⁷⁾。

その意味では一九一八年三月に当時の有力な文芸誌のひとつだった『新小説』に掲載された「日本人の服装問題」⁸⁾は佳三の「総合芸術」観をはじめて世に問うたものであるともいえる。

この記事では佳三の自問自答のかたちで、日本社会の近代化に対応した服装の改良が検討されている。そこで、佳三は図案家としての自分が服装のデザインを行うさい、単に外形だけでなく経済、体育、衛生といった問題をも考慮しなければならないとし、そうした考え方は人間が服をつけ行動する空間としての住宅の改良にも及ぶのである。佳三が提示する新しい住宅のための意匠とは、伝統的な日本風の意匠でなく、また、欧州で見聞した目新しい意匠の採用でもなく、近代化し単純で合理的に変化していく日本の生活にふさわしい全く新しいものが構想されていた。佳三の言葉でいえば「決して和洋並立でもなければ和洋折衷でも無い。渾然と融合された新日本建築」⁹⁾であった。佳三のこうした思考は欧州からの帰国後、当初服飾の問題を対象として具体化された。たとえば和服に用いる「リズム模様」や、フランク・ロイド・ライトが設計した、奇抜なデザインの帝国ホテルで働く、給仕女性のユニフォームのデザインとして。

冒頭でふれた「住宅改良と服装問題」は『新小説』の記事の三か月後、『建築世界』誌に掲載される。『建築世界』は一九〇七(明治四〇)年七月に創刊された雑誌である。一九一八(大正七)年当時には表紙に副題として「土木建築界之顧問」と記されてあるように、建築界の広汎な読者を対象としたものであった。創刊当時、同誌のほかには東京帝国大学建築学科卒業生を中心とする建築学会の機関誌『建築雑誌』のほかいくつかの会員頒布誌が存在していたが、『建築世界』ははじめて一般に市販される建築専門誌として創刊された。この雑誌は成功し、のちには一流建築家を執筆陣に迎える戦前の代表的な雑誌へと成長している¹⁰⁾。一九一八(大正七)

年当時には『建築雑誌』とならぶ最もポピュラーな建築専門誌だったといつてよい。

佳三の「住宅改良と服装問題」は『新小説』の記事をみた『建築世界』が依頼したものでないかと思われる。さきの記事は「日本人の服装問題」のタイトルだったが、すでに触れたように内容では服装の改良を住宅改良、つまり建築の問題との関連で論じていた。佳三は「今日の建築家も余り能が無さ過ぎはしまいか」と建築家をいささか挑戦的にとりあげてもいるし、『建築世界』は二度の個展を開催し旺盛な活動を展開していた佳三に当時盛んだった住宅改良運動にそくして「住宅改良と服装問題」のテーマを与えたのではないか。

一九一〇年代後半は産業の発展、大都市への人口集中が進み、高等教育を受けて俸給生活を送る中間層が増加した時期である。彼らは自身の生活にふさわしい新しい生活様式を望んだが、端的にいえばそれは経済的で合理的な生活ということであり、そこでは家庭の外での洋服・椅子座の洋風生活と家庭内での和服・床座という在来の和風生活との矛盾、つまり「二重生活」の問題の解決が望まれた。こうした関心は一九一五(大正四)年の「家庭博覧会」や翌年設立された「住宅改良会」の運動によくあらわれている。女性教育の専門家三角錫子と洋風住宅の建築販売業をてがける「あめりか屋」創業者の橋口信助を中心に設立された同会は、三角による女性の立場からみた、台所作業の効率化といった課題を新しい住宅設計によって実現しようとするものであった¹⁾。ここではさらに立ち入ることはしないが、一九一〇年代半ばは、こうした生活様式の変化にたいする欲求にもとづいた住宅改良運動がまさに勃興し、注目を浴びた時代だった。佳三の記事はこのような時代の空気を反映するものだったのである。

さて、佳三はこの記事で何をいつているだろうか。わずか一ページの文章であり、しかも抽象的な議論に終始していて、「日本人の服装問題」にみるような具体性に欠けるくらいはあるが、見ていくことにしよう。

まず佳三による文章の前に編集部によって佳三のプロフィールが示されている。そこでは美校卒、渡独の経験そして、創案した「リズム模様」を発表し、前月に白木屋で個展を開催していることを紹介している。

そのあと佳三の文章になる。まず佳三は夫婦の比喻を用いて住宅と服装が生活様式上密接な関連をもつ要素であることを説き、このふたつの要素は「同時同体^{スインクリファイ}に動かなければならない」とする。そして日本の現状を批判し、西洋の生活様式を「様式の純一、単純化、便利、愉快そして其れの進化を有している」と賞賛する。しかし、西洋のそれを単純に輸入することを主張してはならない。彼は、人間が「最善の生活」を行う権利を持ち、民族がその民族の「風格興趣を發揚する自由と誇を有してゐる」と説く。そして、「日本人の未来の生活様式を想定しそして

能ふ限り因襲的形式と無価値な約束とを破壊し、直截に今日の自己、自己即日本人、日本人即民族に忠実な侍臣として生活様式を統一したい」という。

このような議論からは、佳三は新しい生活様式の創案においては「民族」の特徴を示す必要があると考えていたこと、そしてそこでの「民族」とはたんなる伝統あるいは既存の文化の継承ではなく、むしろそうした「因襲」や「無価値な約束」を「破壊」したうえで、自己＝日本人＝民族としての現在の個人の生活から生みだされるものだと考えていることが読みとれるのである。

そして最後に佳三は「若も建築設計家にして此問題を真面目に語らんとする士があるならば、更に／＼細微に渉る（衣食住の）問題につき共に考究したいと思ふ」と建築家たちによびかけている。佳三はこの文章で語らなかつた詳細を別稿で論じる旨を記している。しかし、それが実現された形跡はない。

おわりに

「住宅改良と服装問題」は佳三の執筆した文章の中でも広く読まれたものとしては最も早い時期のものとして注目に値する。そしてこれが建築専門誌としての『建築世界』に掲載されていることは、この時期の佳三の活動が建築界においても一定の関心をもってみられていたことを示すものといえる。

内容面についてみると同時期に書かれた「日本人の服装問題」に譲るところが大きいが、佳三がその持論であるところの服装と住宅の一体的な改良の実践において、建築家との協働を企図していたこと、そして改良の基本的な姿勢をかたちづくる要素としての「民族」を重視していたこと、そして、そこで発揮されるべき「民族」の特徴とは、悪しき伝統を廃した「今日の」個人の生活に根ざしたものであるべきと考えていたことを読みとることができる。このような佳三の民族観にもとづく住宅改良が具現化するには少しの時間が必要であったが、一九二〇年代末における、在来日本の意匠とヨーロッパの新しい芸術潮流を統合した独創的な居室の総合デザインへと結実していくのである。以上みてきたように、この記事によって一〇年代後半における佳三の考え方がより明確になったといえるのではないだろうか。

冒頭で述べたように佳三の全体像はいよいよ明らかになっているが、彼の多様な活動の足跡は今後の新しい発見を予感させる。そして、佳三の活動そのものだけでなく、同時代の社会状況のなかで彼の活動を理解しようとするとき、その活動はより豊かな歴史像を結ぶ手がかりとなるだろう。また、矢島の歴史という文脈でとらえるとき、佳三は上京・渡欧して獲得した知

識を用いて郷里において校歌や校旗のデザインを行ったし、また地域企業、天寿酒蔵の製品ラベルのデザインもものしている。こうした出郷者がもたらす新しい文化が地域の生活にどのようなインパクトをもたらすのかということも興味深い問題である。

1 「初の商業デザイナーで作曲家」矢島町史編纂委員会矢島町教育委員会『続矢島町史下巻』矢島町、1983年、904頁。

2 長田謙一「総合芸術」の諸相と齋藤佳三『一九二〇年代・日本展』朝日新聞社、一九八八年、長田謙一「齋藤佳三——日本的モデルネと「総合芸術」の夢」『総合芸術』の夢 齋藤佳三展』朝日新聞社・秋田市立千秋美術館、一九九〇年、長田謙一『INAX ALBUM 4 齋藤佳三/ドイツ表現主義の建築・夢の交錯』INAX出版、一九九二年、長田謙一「齋藤佳三——一九三〇年—杭州/上海の経験—」『齋藤佳三の軌跡』東京芸術大学美術館、二〇〇六年など。

3 齋藤佳三「住宅改良と服装問題」『建築世界』第六卷一二号、一九一八年六月。

4 島津京/藪田弘子編『齋藤佳三の軌跡』東京芸術大学美術館、二〇〇六年。

5 この節の記述については長田謙一「齋藤佳三——日本的モデルネと「総合芸術」の夢」『総合芸術』の夢 齋藤佳三展』朝日新聞社・秋田市立千秋美術館、一九九〇年を参照。佳三の動向の詳細については上記を参照されたい。

6 個人の創造性の自由な表現や総合性の重視といった考え方は、日本においても一九一〇年代末から二〇年代前半にかけて、明治期の技術偏重の近代化や分業制の進展の反動として若者のあいだによくみられた考え方である。

7 「参考文献」前掲『齋藤佳三の軌跡』。

8 齋藤佳三「日本人の服装問題」『新小説』第三三卷三号、一九一八年三月。

9 ルビは原文ママ。「ヤパーニッシェゼツエシヨン」とは「日本の分離派」を意味するものと思われる。分離派は一九世紀末から二〇世紀初頭の独逸を中心起こった芸術運動。過去の様式にとらわれない総合的な芸術を志向した。

10 菊岡俱也『建築世界』（「解題」）菊岡俱也、藤井肇男編『日本近代建築・土木・都市・住宅雑誌目次総覧 第一期第二巻』柏書房、一九九〇年。

11 内田青蔵『日本の近代住宅』鹿島出版会、一九九二年、七二〜九八頁。